

# NEWSLETTER #131

日本ポピュラー音楽学会

vol.34 no.2 Dec 2022

## JASPM34 大会直前案内

- |     |                     |      |
|-----|---------------------|------|
| p.1 | 大会実行委員長挨拶 .....     | 中川克志 |
| p.2 | JASPM34 プログラム ..... | 輪島裕介 |

## 研究例会報告

- |     |                              |       |
|-----|------------------------------|-------|
| p.3 | 2022 年度 第 1 回オンライン例会報告 ..... | 井手口彰典 |
| p.4 | 2022 年度 第 2 回オンライン例会報告 ..... | 永富真梨  |
| p.6 | 2022 年度 第 3 回例会報告 .....      | 福永健一  |

## Information

- p.7 事務局より

## JASPM34 大会直前案内

### 大会実行委員長 中川克志

JASPM 第 34 回大会がいよいよ間近に迫ってまいりました。今年度も、充実した個人発表並びにワークショップを組むことが出来ました。これもひとえに会員の皆様の活発な研究活動を反映するものでしょう。また、「ポピュラー音楽研究と「音」というフィールド」と題したシンポジウムでは、阿部万里江さん、大友良英さん、岸野雄一さん、山本佳奈子さんにご登壇願ひ、「現場」をテーマとしてお話していただきます。私たちが今後それぞれの「現場」

で活動していくための刺激を得られることを期待しています。

コロナ禍以降を模索する本大会は様々な点で例年とは異なり、初日にシンポジウムを、二日目に個人発表並びにワークショップを開催します。シンポジウムは対面と配信のハイブリッド形式で、研究発表は全面オンライン形式で開催します。シンポジウム会場は(実行委員長の勤務校ではなく)東京芸術大学となります。対面での参加を検討している会員の皆様は、どうぞご注意ください。

今大会も、PassMarket やら Zoom やら目新しくも慣れ親しみつつあるだろう様々なツールを駆使して運営されます。皆様にも色々とお不便をおかけするかもしれませんが、どうぞよろしくお願ひします。対面参加にせよ配信参加にせよ有意義な大会になるだろうことを楽しみにしています。

(JASPM34 実行委員長 中川克志)

## 注意事項

以下に記載の大会プログラムや、Zoom 接続情報、要旨集・配布資料の格納場所、シンポジウム会場アクセスに関する詳細は、JASPM34 ウェブサイトにて案内しています。なお、会員であっても「PassMarket」からの参加申込が必要です。必ずご確認ください。

<https://www.jaspm.jp/jaspm34/>

また 12 月 17 日(土)に開催予定の総会資料は、会員管理システム SMOOSY の「会員マイページ」内「お知らせ」にて公開します。対面参加者には紙面配布し、オンライン参加者には Zoom の画面共有機能にて表示します。

## <JASPM34 プログラム>

### 12 月 4 日(土)

#### ● シンポジウム (13:00-17:00)

「ポピュラー音楽研究と「音」というフィールド：現代東アジアの文脈におけるサウンド・スタディーズの可能性」  
会場

対面（会員のみ）：

東京芸術大学千住キャンパス第7ホール

オンライン配信：Zoom ウェビナー（参加無料・[要登録](#)）

登壇者（50音順）

阿部万里江（Marié Abe）

大友良英

岸野雄一

山本佳奈子

司会

中川克志

#### ● 総会 (17:30-終了)

### 12 月 5 日(日)

#### ● ワークショップ A Zoom ストリーム A (10:00-12:00)

「表現文化としての音楽文化 ポピュラー音楽とテクノロジー、サブカルチャー、アート」

粟谷佳司（立命館大学）

太田健二（四天王寺大学）

石川琢也（京都芸術大学）

有國明弘（大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程）

川上幸之介（倉敷芸術科学大学）

#### ● ワークショップ B Zoom ストリーム B (10:00-12:00)

「ポピュラー音楽の諸実践における場所・空間概念の再考」

コーディネーター：加藤賢（大阪大学博士後期課程3年）

報告者：星川彩（大阪大学博士後期課程1年）

討論者：安田昌弘（京都精華大学）

討論者：長尾洋子（和光大学）

#### ● 個人発表 Zoom ストリーム A (13:30-17:00) :

13:30-15:00

司会・宮入恭平

##### 1. ローカルな音楽空間におけるネットワークの重層化と開放性——堺から世界へ——

新山大河（立命館大学大学院 先端総合学術研究科 一貫制博士課程）

##### 2. 沖縄民謡パーと沖縄系人の関係性—ハワイのオアフ島を対象に—

澤田聖也（東京藝術大学大学院後期博士課程、ハワイ大学マノア校文化人類学学科研究訪問員）

##### 3. 1991年に始まった二つの音楽フェスティバル

指田文夫（大衆文化評論家）

休憩 15:00-15:30

15:30-17:00

司会・高岡智子

##### 1. Gypsy Punk におけるジプシーとキャバレー

室之園直己（関西学院大学大学院文学研究科 文化歴史学専攻 博士課程前期課程）

##### 2. 音楽活動に都市政策が与える影響 —ブリュッセル首都圏ヒップホップミュージックの事例から—

安彦良紀（ブリュッセル自由大学博士課程、大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程）

##### 3. 地方から再考するニューミュージック：さだまさしと中島みゆきにおける反メトロポリス性

ドレックスラー アニータ（DREXLER Anita）（大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程）

● 個人発表 Zoom ストリーム B (13:30-17:00) :

13:30-15:00

司会・金成 玖

1. 1980 年前後の日本における韓国歌謡ブーム:「釜山港へ帰れ」の事例を中心に

孫長熙 (ソン・ジャンヒ) (大阪大学大学院 人文学研究科 博士後期課程)

2. K-POP 女性グループと多様化するガールクラッシュ— 楽曲における「強さ」の表現方法の分析—

西森真菜 (関西学院大学大学院文学研究科博士課程前期課程)

3. (邦楽ロック)黎明期における音楽雑誌の役割——1994 年から 1997 年の『ロッキング・オン・ジャパン』を中心に 菊池虎太郎 (大阪大学人文学研究科博士前期課程)

休憩 15:00-15:30

15:30-17:00

司会・溝尻 真也

1. ポスト CD のメディアの諸相とその変化 光学ディスクとハイレゾリューションオーディオを例に

中村将武 (東京大学大学院 博士後期課程)

2. アーティストの影響関係による音楽推薦 Web アプリケーションの開発

竹本万里 (九州大学大学院博士前期課程)

以上

2022 年度 第 1 回 オンライン例会報告(前半)  
井手口 彰典

2022 年度 第 1 回 オンライン例会 卒論・修論発表会

日時: 3 月 29 日(火) 9:45~17:00

会場: Zoom

セッション 1・2

オンライン例会も今年で 3 年目。対面には対面の良さがあるが、他方で居住地域を問わず多くの発表を聴ける

のはオンラインならではのメリットだ。以下、午前中のセッションについて簡単にコメントさせて頂くが、その前に全ての発表(午後も含め)を踏まえてひとつ提案を。

PowerPoint 等のプレゼンソフトは色や図像を交えて視覚に訴えることのできるツールだが、書き込むテキスト量には若干の配慮が必要である。文字だけのスライドが短時間でスパスパ切り替わると、聞いている側は追いつけなくなるのだ(読んでいる最中の画面を強制的に消されるのはなかなかストレスフルである)。読み上げ原稿をそのまま流し込むのではなく、スライド枚数とテキスト量を絞って要点だけピンポイントで強調すればもっと効果的なのに……と感じる発表が散見された。参考になれば幸いである。

さて、セッション A のトップバッターは木村 颯氏の「アルメニアのポップフォークにおける両義性」。おそらく多くの学会員にとって未知の領域で、非常に刺激的な発表だったが、それだけにもっと掘り下げて聞きたい点も多くあった。たとえば「近隣諸国でカバーが盛ん」という事実と「アルメニアらしさ」の間の矛盾を人々が具体的にどう止揚しているのか。また YouTube の登場に代表されるメディアの変化がなぜ右傾化(のみ?)を招いたのか。そしてそもそも、現地の人々が純粋な「アルメニア音楽」なるもの(仮にそんなものがあるとしてだが)をどう認識しているのか……。是非研究を深めて頂きたい。続いて小林美耶子氏の「ミュージックビデオにおける「オマージュ」について」。映画論などでは広く議論されている「オマージュ」だが、多数の MV を事例に取った分析は斬新。ただ、(質疑でも出ていたとおり) Vernallis の術語としての「オマージュ」と一般言説としての「オマージュ」がズレてしまうのは当然で、その差を海外と日本との相違に短絡させることはできない。今回はサンプルが多かったが、明確に (Vernallis 的な意味で)「オマージュ」だと断じられる事例に絞った精密な事例分析も聞いてみたい。

休憩を挟んでセッション B は恒石裕也氏の「アウラの崩壊」で再スタート。複製物にもアウラは宿りうる、という趣旨の発表だが、類似の議論は既に各所でなされている(たとえば遠藤薫『廃墟で歌う天使』2013)。本発表のメインテーマである「流行歌」が帯びる独自の事情や背景などを踏まえつつ、より「絞った」議論ができるなら、今後個性的な研究へと発展していこう。続いては上 梓

祐人氏の「アコースティック・フィードバックを用いた音楽作品に対する外的要因としての音場の影響」。作品が上演される個々の空間の相違に人々の意識を向けたい、という発表者の意図自体は説得的なので、発表のなかでその点（研究が果たしうる社会的意義）をもっと強調してよかつたのではないか。なお半無響室という特殊環境の利用は、普段意識されない日常的空間の個性を（対比的に）照らし出す上で有効である反面、特殊であるがゆえに「実験のための実験」になってしまいがちな点に注意が必要である。ラストは鷺尾拓海氏の「生物の鳴き声による創作楽器の制作」。先の上村氏と同様、研究の意義を発表のなかでもう少しアピールしてほしかった。質疑では「虫などの声にきちんと耳を傾けるよう促したかった」という旨の説明があったが、ではなぜそれが「楽器」化を通じてなされるべきなのか。楽器は自然現象としての音を人間が作為的に制御するための装置である。虫の鳴き声なども含めた自然の音に意識を向けさせるために、それを人為的に制御する、という戦略の有効性と限界について、一定の検証が必要ではないだろうか。

以上、好き勝手に述べてきたが、いずれもフレッシュな論考で自分の研究についてもあれこれ考えるヒントをもらえた。各発表者の今後の活躍に期待したい。

(井手口彰典)

## 2022年度 第2回 オンライン例会報告 永富真梨

2022年度 第2回 オンライン例会 卒論・修論発表会

日時：6月26日(日) 16:00~18:00

会場：Zoom

JASPM Special Session “Tutti Frutti: Little Richard, Sex, Gender, and Transgression in America and Europe”

Guest Speaker: Dr. Jacob Bloomfield (University of Konstanz)

Discussants: Yuka Kanno (Doshisha University), Toshiyuki Ohwada (Keio University)

Moderator: Amane Kasai (Waseda University)

Co-host: Waseda Institute for Advanced Study

日本ポピュラー音楽学会 2022年度第2回オンライン例会は、2022年6月26日日曜日、日本時間午後4時から6時にZoom上で開催された。ドイツのコンスタンツ大学で博士号を取得したジェイコブ・ブルームフィールド(Jacob Bloomfield)氏が、「Tutti Frutti: Little Richard, Sex, Gender, and Transgression in America and Europe」と題された研究発表を口頭で行った。本例会は、早稲田大学の葛西周氏が司会・進行を務め、慶應義塾大学法学部の大和田俊之氏、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の菅野優子氏が討論者を務めた。オンラインで開催されたため、日本全国のみならず、世界各地の会員と非会員が参加し、活発な議論が展開された。

ブルームフィールド氏は本発表で、アメリカの黒人男性シンガー、リトル・リチャードが、周縁的な性自認と性的指向を持つミュージシャンとしてのペルソナを表現しながらも、欧米で人種を超えて人気を得た理由を考察した。このようなクィアな視点を含むポピュラー音楽研究は、日本のポピュラー音楽研究において希少である。この点については、ジェンダーの視座に根ざしたポピュラー音楽研究の日本における研究成果として、1999年に出版された『鳴り響く性』以後、代表的な専門書が僅少であることが、例会の冒頭で司会の葛西氏から指摘された。

発表では最初に、ブルームフィールド氏の発表が、人種、ジェンダー、セクシュアリティの規範に関する考えが現代とは異なる20世紀半ばに人気を獲得したリチャードの活躍を精査し、リチャードのクィアらしさを歴史化する点において重要であることが述べられた。

次に、リチャードのミュージシャンとしてのペルソナが当時のジェンダーとセクシュアリティの規範とは異なるものであったかが、楽曲「トゥッティ・フルッティ (Tutti Frutti)」、「ロング・トール・サリー (Long Tall Sally)」や、彼が出演した映画『ドント・ノック・ザ・ロック (Don't Knock the Rock)』を事例に、紹介された。

その後、リチャードのクィアなペルソナが人気を博した当時の欧米社会におけるクィアの人々をめぐる文脈が説明された。第1に、実際の社会生活において、同性愛者や男女のジェンダーの規範を曖昧にする存在は、精神異

常者、犯罪者として理解されていた。第2に、アメリカのアフリカ系アメリカ人コミュニティや、夜の歓楽街においては、クィアの人々が白人の主要文化よりも比較的寛容に受け入れられていた。第3に、公民権運動の広がりと共に、アフリカ系アメリカ人が、中産階級的な模範性(リスペクタビリティ)を理想として求める中で、ナイト・ライフを楽しむ行為などが批判的に捉えられる風潮もあった。

ブルームフィールド氏は、以上の多層な文脈を踏まえて、リチャードのクィアなペルソナが、現代認識されるように反体制的なものであったかを疑問視した。例えば、リチャードは1950年代から1960年代、女性らしい態度や格好をすればするほど人気を獲得できたと言言している。それは、リチャードのクィアなペルソナが、特に白人女性のファンにとって性的な脅威として機能せず、結果的に白人男性が恐怖を抱いたとされる性欲旺盛な黒人男性像を裏切ることがなかったことを示唆する。したがって、リチャードの当時の活躍は、リチャードの白人ファンが持つ、黒人男性の性的能力や性に関する嗜好に向けられる人種主義的な態度を転覆させるというよりは、なだめるものでしかなかったと論じられた。

さらにブルームフィールド氏は、リチャードに関する先行研究では扱われてこなかった一次史料を精査することで、クィアらしさがより精細に歴史化されると論じた。例えば、1950年代後半から1960年代初頭のクィア・プレス(現在クィアと呼ぶことのできる人々による、クィアの人々をターゲットにした出版)が、リチャードの活躍を賞賛せず、彼を恥じらいの象徴として扱ったことが紹介された。このような史実は、ジェンダー・セクシュアリティ・人種の規範を転覆させた存在として語られるリチャードに対する現在の評価を裏切るものであり、当時のクィアらしさへの理解や社会における位置づけをより明確にする。

例会の後半では、討論者からのコメントと質問がなされた。大和田氏は、現代のアメリカ文化と黒人コミュニティにおいても、特にギャングスタラップや南部のヒップホップが、黒人ミュージシャンによるブラックフェイスの minstrel であると批判されていることを指摘し、クィアのアイデンティティを表明することでも人気を獲得したリル・ナズ・Xとリチャードの相違点を尋ねた。ま

た、ブルームフィールド氏が導き出したリチャードの成功の経緯は、当時のアメリカで新たに出現したティーンエージャーのための市場と、テレビの出現によるメディア環境の変化の文脈も総合するといかに説明できるかも問われた。ブルームフィールド氏は、黒人男性のクィアのアーティストとして人気を獲得したリル・ナズ・Xとリチャードの類似点は認めつつも、ジェンダー・セクシュアリティに関する一般的な理解が異なる歴史的背景の違いもあると再度強調した。市場やメディア環境の変化の文脈を総合して考察することに関しては、今後の課題とするとした。

第2討論者の菅野氏からはクィア・スタディーズとフィルム・スタディーズの見地からコメントと質問がなされた。菅野氏はブルームフィールド氏の本研究を、クィアらしさが個人並びに歴史的に構築されるとの理解を支える重要なものであると位置付け、クィアらしさに関する考えを歴史化する研究分野に貢献するものであるとして評価した。菅野氏はさらに、リチャードの『女はそれを我慢できない(The Girl Can't Help It)』(1956)や、『ピンク・フラミンゴ(Pink Flamingos)』(1972)への映画出演に言及し、リチャードのクィアらしさや美学を考えるにあたり、メディア媒体の違いを考慮する必要があると指摘した。最後に、リチャードによるドラッグは、地域で異なるドラッグのスタイルのどこに位置づけられるのか、リチャードはどのようなドラッグ・パフォーマーであったか、どのような女らしさを前面に出していたのが尋ねられた。また、リチャードが宗教へ傾倒した時期に、完全に女性らしさを封印したのかどうかなどを、黒人教会を中心とするコミュニティが黒人のゲイ男性の拠点でもあった歴史文脈と照らし合わせてどのように説明できるかも問われた。ブルームフィールド氏は、これらの質問が今後の研究の発展につながるとし、各質問に関わるリチャードの活動や体験で現在把握している事項について説明した。

フロアからは、発表で主に分析されたパフォーマンスの側面ではなく、リチャード個人の音楽的な技術や創造性について質問がなされた。

(永富真梨)

## 2022年度第3回例会報告 福永健一

### 細川周平『近代日本の音楽百年』合評会

日時：2022年7月10日(日) 14:00~17:00

会場：大阪大学豊中キャンパス

#### 評者(五十音順)

垣沼絢子(無所属)

梶大也(九州大学大学院芸術工学府 博士後期課程)

張佳能(大阪大学博士後期課程 日本学術振興会特別  
研究員 DC2)

西澤忠志(立命館大学先端総合学術研究科一貫制博士  
課程)

山田淳平(奈良県)

#### 応答

細川周平(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センタ  
ー 所長)

#### 司会

輪島裕介(大阪大学)

2022年3月、電子雑誌『人文×社会』第5号(東京大学人文社会系研究科・文学部)において、「私たちにとっての近代日本音楽史—細川周平『近代日本の音楽百年』読書会記録」が掲載された。標題のとおり、細川周平(2020)『近代日本の音楽百年』全4巻についての書評論文集である。西澤氏の呼びかけで集まったメンバーで読書会を行い、その成果をふまえて各メンバーが書評を執筆したものがこの書評集である。

本例会は、書評集の評者らと著者が相見えての合評会として企画された。評者らの書評および質問に対して著者が応答し、それからオーディエンスを交えた討論に移った。会は対面で行い、Zoomでの中継もされた。参加人数は合わせて50数名であった。

本報告は、評者、著者、オーディエンスのコメントおよび討論をまとめたものである。なお、本会は書評論文に基づいて議論されたため、この報告書に目を通す前に、書評

を読んでいただくことをおすすめしたい。  
<https://jinbunxshakai.org> から入手可能である。

#### 評者コメントと著者の応答

西澤氏：近代日本音楽史の先行研究である堀内敬三(1942)『音楽五十年史』と比較し、細川氏の著書は音、リズム、文学、踊りなどを取り上げており感性史としての音楽史として評価できる。著者に対する質問として、東京を中心とした「トントン史観」がどこまで適用可能なのか、戦後で終わる本書が現在の音楽や社会とどうつながるかをたずねたい。

細川氏：堀内本と比較して音楽のみならず音(サウンド)を重視しているのは、近年の研究動向や複製技術への関心をふまえてのもの。東京中心となったのは、資料の限界や本書が連載として始まったとき、そこまで想定していなかった。東京以外のこと、現代とのつながりなど全体をカバーしきれていないという不満はあるかもしれないが、そこは後進に委ねたい。

山田氏：「音楽」概念について、細川氏の著書含めて近代音楽研究では近世と近代との断絶を強調するが、近世音楽史を紐解くと、近世にも「音楽」の語はすでにあり、かつ音楽論や音楽観は近代にも継承されているところもある。したがって洋楽受容をもって近代音楽が始まると位置付けるよりも、近世の音楽論の展開を踏まえたうえで近世と近代の音楽をつなぐ議論が必要ではないか。

細川氏：たしかに著書では近世まで遡及していないが、近世音楽研究で扱われるのは「音楽」より「楽」のことではないか。たしかに江戸期にも「音楽」の語はあるが、その語は当時どこまで広がっていたか、あるいは明治期に「楽」がどれくらい語られたか。近代の音楽概念は近世の「楽」概念をそう深く参照したわけではないように思われる。ゆえに断絶がないとの評だが断絶はあると考えている。

張氏：史観ないし歴史の紡ぎ方について、全体を俯瞰するよりもトピックを限定して書くところに特色があるが、それゆえに記述が薄いと見える箇所もままあった。また、本書の音楽史は1945年で終わるが、戦前・戦後といった時代区分よりも貫戦史的視点が必要だと考えている。

細川氏：たしかに記述が薄くなったところはあるが、そこはみなさんの研究に委ねたい。

## 事務局より

## 1. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちで JASPM の活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から 1,000 字から 3,000 字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニュースレターは学会ウェブサイト掲載の PDF で年 3 回（2 月、5 月、11 月）の刊行、紙面で年 1 回（9 月）の刊行となっておりますが、128 号より紙面での刊行は会員システム SMOOSY（会員マイページ）上での公開に移行となっております。会員情報変更等、会員の動静に関する情報は SMOOSY にて公開される号にのみ掲載され、会員マイページ上のみで閲覧が可能です。PDF で発行された号については JASPM ウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています。

（URL：[https://www.jaspm.jp/?page\\_id=213](https://www.jaspm.jp/?page_id=213)）

次号（132 号）は 2023 年 2 月発行予定です。原稿締切は 2023 年 1 月 20 日とします。また次々号（133 号）は 2023 年 5 月発行予定です。原稿締切は 2023 年 4 月 20 日とします。

投稿原稿の送り先は JASPM 広報ニュースレター担当 ([nl@jaspm.jp](mailto:nl@jaspm.jp)) ですので、お間違えなきようご注意ください。ニュースレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

## 2. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局 ([jimu@jaspm.jp](mailto:jimu@jaspm.jp)) まで郵便または E メールでお知らせく

垣沼氏：チンドン屋、浅草オペラ、笠置シズ子、軽音楽への言及について、戦時下における言説をどこまで所与のものとして捉えたか尋ねたい。また、演劇研究の観点から笠置シズ子の歌い方に関する言及は興味深かったが、笠置のパフォーマンスは時代によるものなのか、あるいは他にどのような文脈があるか尋ねたい。

細川氏：言説の捉え方については、産業や業界など統制側の態度や言葉や制度を一面的に捉えているくらいはあるかもしれない。笠置のパフォーマンスは時代によるものもあればオリジナリティもあると思う。笠置に関しては松竹歌劇について調べたくとりあげたところが大きい。

梶氏：著者が書き残したこと、あるいは今後の構想について尋ねたい。

細川氏：洋楽の需要が進んだ明治期に近代洋楽の裏で「近代邦楽」がどのような歴史をたどったかについて。またはマンドリン、ハーモニカ、アコーディオンといった「軽楽器」について。ほかに楽譜、映画館、ダンスホール、ダンサー、バンドマンなどについて取り組みたいと考えている。

## 全体討論

全体討論では、山田氏がとりあげた、近世と近代との音楽概念の断絶ないし連続性についての議論がとくに盛り上がった。たとえば、芸能、興行といったパフォーマンスアーツから近世と近代の音楽史を振り返ることができるのではないかと。制度等で断絶はあるとしても、浪花節、歌舞音曲、鳴物などの言葉や概念から、近世と近代の音楽の繋がりをたぐるのではないかと。近世音楽が近代においてどのようなものに変化したか。といった議論が行われた。ほか、近代音楽史において偶像化、スキャンダル化される傾向にあった女性をどう音楽史で取り上げるかというような、ジェンダーに関する議論も行われた。

紙幅の都合で書ききれなかったこともあるが、以上が本例会の記録である。以上、盛会となった本会の様子が伝われば幸いである。

（福永健一）

ださい。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。例会などのお知らせは E メールにて行っております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

### 3. 会費請求について

2023 年 4 月に、2023 年度の会費請求書類を、学会誌 Vol.26 (2022) と一緒に会員の皆様のお手元にお届けします。

学会誌 Vol.26 (2022) は 2022 年度の会費納入者にお送りしておりますので、学会誌が同封されていない場合は、速やかに会費を納入いただきますようお願いいたします (会費納入後速やかに学会誌を送付いたします)。

また、滞納分の会費納入をしたにも関わらず、学会誌が届いていない場合には、入れ違いや何らかの手違いが発生している可能性がございますので、お手数ですが事務局までご一報ください。

**JASPM NEWSLETTER 第 131 号**  
(vol.34 no.2)

2022 年 12 月 12 日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 細川周平

理事 毛利嘉孝・井手口彰典・東谷護・  
大山昌彦・鈴木洋子・伏木香織・  
輪島裕介・日高良祐

学会事務局：

〒120-0034

東京都足立区千住 1-25-1

東京藝術大学 千住キャンパス

大学院国際芸術創造研究科

毛利嘉孝研究室内

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニューズレター関係)

<https://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：日高良祐